

糖尿病治療の最前線

“体のだるさ”の原因は 高血糖だけではない

男性ホルモンの減少により倦怠感が現れたJさんのケース



担当医 久保 明先生
医学博士
糖尿病内分泌専門医
東海大学医学部抗加齢
ドック教授

| | | | | | | | |
|------|------|----|-----|----|----|-----|-----|
| 患者氏名 | J・F様 | 年齢 | 63歳 | 性別 | 男性 | 現病歴 | 糖尿病 |
|------|------|----|-----|----|----|-----|-----|

40 代後半に糖尿病と診断されて、かれこれ 15年になるJさん。飲み薬で治療をされており、ヘモグロビンA1cは6.2〜6.5%と、落ち着いた状態を維持しておられます。肥満もなく、肝機能も良好です。

ところが数年前から、「体がだるい」とおっしゃるようになったのです。通常の健診ではとくに異常は見られません。そこでホルモン系統の検査をしたところ、甲状腺ホルモンの値は正常でしたが、男性ホルモン（テストステロン）が5.8pg/mlと、明らかに基準値より低いものでした。つまりJさんの倦怠感は、更年期障害が原因だろうと考えられます。

更年期障害は男性にも起こりうるものです。加齢により男性ホルモンが減少し、女性の更年期のような不定愁訴が現れることがあります。

Jさんには2つの治療方法をご提案しました。一つは、男性ホルモンを

数週間ごとに筋肉注射で補充する方法、もう一つは、外国製の男性ホルモンクリーム（保険対象外）を皮膚に塗る方法です。

Jさんは最初、筋肉注射を選択しましたが、注射時の痛みがストレスになったためクリームに変更し、1年間ほど治療を続けました。その結果、男性ホルモンは増加し、倦怠感もすっかり解消されました。

倦怠感は、高血糖や脂肪肝によって生じることが多いものですが、なかにはJさんのように、ホルモン系統が原因の場合もあります。頻度が少ないため見逃されがちですが、今日の医療ではホルモン量を調べることも、治療することも可能です。気になる方は一度受診されてみてはいかがでしょうか。

ただし、男性ホルモンの治療を行う際は前立腺がんの発症に注意し、年に数回、PSA検査（血液検査）をすることをおすすめします。